慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	吉野俊彦著 日本銀行
Sub Title	
Author	飯田, 裕康
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1963
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.56, No.11 (1963. 11) ,p.1154(152)-
JaLC DOI	10.14991/001.19631101-0152
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19631101-0152

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

吉野俊彦著

『日本銀行』

こんにち、産業体制再編成（新産業体制）が日本経済の当面する諸状況のうちから最も基本的な問題として提起され、諸方面の論議を呼んでいるが、そのなかでとりわけ重要な課題として、金融正常化への積極的な志向をみのがすわけにはゆかない。国際的な視野からするわが国経済の問題点がまず対内的に解決されてゆくためにも、この「正常化」は緊急の課題であるとされていることは周知のとおりである。日本経済のもつ歪みが、金融構造のうえに反映し、いわゆる「オーバー・ローン」に代表される特殊な姿をとって現われているという点については、いまさら詳言は要しないところであろう。こうした特徴のよってきたるところが一体何に原因するのか、これを実証的・理論的に解明することは、金融問題の要点でもある。本書はこうした日本経済の当面する問題点を念頭に、金融の中枢たる日本銀行のなりたち、機能、課題等々にわたって、ごく啓蒙的に書かれたものである。

本書における著者のいわんとするところは大要つぎのように言ってよいであろう。まず、日本銀行は、国民経済中の最重要な位置にあり、また、政府の政策に密接しているごとき印象を与えるが、本来、中央銀行としては国民の経済生活により密着したものであるはずである。通貨調整（これはごく広い意味で）をとおして、国民生活の安定に寄与しなければならず、「誰れのもの」と問われれば、まさに吾々国民のものと答えるべきものであるとされる。このような点は、今日までの日本銀行の中央銀行としての歴史のなかでどのように生かされたかをみると、その成立当初より、「官立的官法的性格」をもち、日本における資本主義発達の歪みをそのまま金融場裡にもちこんでしまい、それを構造化してきたとされる。このような観点から本書では現在の課題として、近年、日本銀行が、支払準備制度のようなより進んだ金融政策を押し出してゆくといった機能運営面と、さらに、歴代の日本銀行の制度改革問題に重点を置いている。とくに中央銀行と政府との関係という点で、いわゆる中央銀行の「中立性」を基調とする現在の西ドイツのブンデスバンクの制度に範をとることを主張されている。

日銀の機能と役割についても、多くの紙数がさかれているが、著者の見解は総じて、日銀中心の見方に終止しているの感をまぬかれない。さし迫った課題としての金融正常化などが、一般の（独占的）産業企業や、市中金融機関の資金需給構造の特異な現状からいわれていることもたしかであるが、他方、中央銀行が、銀行の銀行としての基本的な機能を十分発揮しえないまま、国家の財政政策や、企業の投資意欲にひきずられてきたところに原因がひそんで居はしないだろうか。この点は、単に今日的な問題でなく、日本銀行をも含むわが国の金融機構全体のもった歴史的特質に根差すものではなかろうか。かかる日本経済の構造的展望のうちで中央銀行の役割・地位について再検討するといった「見通し」論が稀薄なのは残念なことであるが、これは、吾々一人一人が真剣に考えるべき問題なのかもしれない。（岩波書店・一九六三年五月刊・新書判・二一五頁・一三〇円）

—飯田裕康—